

No	感染症(PT)	出典	概要
66	鳥インフルエンザ	Lancet 2007; 370: 1137-1145	H5N1インフルエンザウイルスに感染した男性1名および妊婦1名とその胎児の剖検組織を調べた。肺のⅡ型上皮細胞、気管の上皮細胞、リンパ節のT細胞、脳の神経細胞及び胎盤のホフバウエル細胞と細胞栄養層でウイルス遺伝子配列と抗原が検出され、腸粘膜ではウイルス遺伝子配列のみが検出された。胎児では肺、末梢単核細胞、肝マクロファージに遺伝子配列と抗原が検出された。本ウイルスは肺だけでなく気管に感染し、脳を含む他の器官に拡がり、また胎盤を通過し、母親から胎児にも伝播しうる。
67	鳥インフルエンザ	ProMED-mail20070110.0097	中国東部の37才の農夫がトリインフルエンザH5N1株に感染していることが確認された。2006年7月以来のトリインフルエンザ症例であると、2007年1月10日に発表された。症例は2006年12月10日に発症し、全快後、2007年1月6日に病院を退院した。検査でH5N1株陽性であったことが確認された。付近の家禽でトリインフルエンザのアウトブレイクはみられていない。2003年以来、中国では22例のヒト症例が報告されており、うち死亡例は14例である。
68	鳥インフルエンザ	ProMED-mail20070111.0119	韓国保健省は2007年1月11日、養鶏場作業員が2006年末にトリインフルエンザに感染したが、重症ではなかったと発表した。患者は2006年11月に養鶏場で発生したH5N1株のアウトブレイク後に感染した。
69	鳥インフルエンザ	ProMED-mail20070120.0260	2007年1月18日、農林水産省は、宮崎県の養鶏場で発生したトリインフルエンザは高病原性ウイルスによるものだったと明らかにした。同省は養鶏場で死亡した鶏から採取したウイルスのサンプルを検査して病原性が高いものであることを確認した。H5N1型ウイルスの流行は、宮崎県清武町の谷口野場黒坂農場で発生し、3つある鶏舎のうち1つで3500羽の鶏が死亡した。
70	鳥インフルエンザ	ProMED-mail20070304.0752	2007年2月27日にトリインフルエンザH5N1株に感染していることが確認されたFujian省の農業に従事している女性(44才)は、病院において治療を受けている。患者は急激に肺炎症状を呈し、入院後昏睡となった。中国における23例目のトリインフルエンザ症例である。女性は死亡した家禽との接触が確認されている。女性に対してヒトの回復期血清(2006年12月にトリインフルエンザH5N1株に感染したが、その後回復したAnhui省の農業従事者からの血清)を治療に使用した。
71	鳥インフルエンザ	ProMED-mail20070320.0975	香港でトリインフルエンザH9N2株に感染した生後9か月の女児が病院で隔離されたと2007年3月20日に保健当局は発表した。本症例は2007年3月4日に発病する前は、ほぼ毎日、生きた家禽を販売する食料品市場を訪問していた。この患児は市場でトリから感染したのではないかと疑われている。H9N2株はトリインフルエンザAウイルスの弱毒株である。
72	鳥インフルエンザ	ProMED-mail20070329.1080	中国保健省は、東部Anhui省におけるトリインフルエンザの新規ヒト症例(男、16才)を確認した。この症例は2007年3月7日に発症し、3月18日に入院したが、3月27日に死亡した。中国CDCの検査により、本症例はトリインフルエンザウイルス株H5N1に感染していたことが確認された。2003年以降の中国における24例目のトリインフルエンザ症例、15例目の死亡例である。
73	鳥インフルエンザ	ProMED-mail20070928.3212	N5N1トリインフルエンザウイルスは妊婦の胎盤を通過可能であり、胎児に感染することが北京大学の研究者らにより報告された。またウイルスが肺だけでなく、胃腸管、脳、肝臓および血液細胞へ拡がるとのエビデンスが示された。
74	鳥インフルエンザ	ProMED-mail20071208.3967	中国Jiangsu省保健局は2007年12月2日に当局はJiangsuで高病原性トリインフルエンザのヒト症例を確定したが、この患者(24歳男性)は多臓器不全で死亡したと発表した。家禽との接触歴はなかったが、発症の20日前にイヌに咬まれたとのことである。また、この患者の52歳の父親もH5N1トリインフルエンザと確定されたが、生存している。感染の原因は調査中である。
75	鳥インフルエンザ	Reuters Foundation AlertNet 2007年9月27日	H5N1トリインフルエンザウイルスは妊婦の胎盤を通過して胎児に感染することができると研究者が報告した。ウイルスは肺だけでなく胃腸管、脳および血液細胞にまで達することも証明された。また、ウイルスは免疫系の一部を過剰刺激し「サイトカインストーム」を起こすだけでなく、マクロファージに障害を与えるなど免疫系の他の部分を抑制することが示唆された。
76	鳥インフルエンザ	Transfusion 2007; 47: 452-459	血漿製剤の製造中に通常使われるウイルス不活性化処理、即ち、ヒトアルブミンの低温殺菌、静注用免疫グロブリン(IVIg)のSD処理、第Ⅷ因子インヒビターバイパス複合体製剤の蒸気加熱、及びIVIgの低pHインキュベーションが、H5N1インフルエンザウイルス不活化に有効かを再集合体株を使って調べた。その結果、H5N1インフルエンザウイルスは、エンベロープウイルスと同様の挙動を示し、これらのウイルス不活性化処理によって効果的に不活化された。